
尾張町を支えた女たち その参

古書に金沢らしさを見つけつつ



表紙絵 村上隆氏(村上洋品店社長・尾張町商店街振興組合副理事長)

目 次

はじめに	1
初めて金沢に出て来て	2
慣れない金沢生活での苦勞	4
こだわりのない子供達	6
店の商売と金沢気質について	9
うちの人(主人)の商売感覺	12
お客さんとの付き合い	14
店でのお客さんと、この建物について	16
商いの“ところ”を伝えて	18
あとがき	22

初めて金沢に出て来て

ここの店の本店というのは富山の市内にある古い店ながや。今でも、7人兄弟の4番目に生まれた長男が店を継いでいるけど、最近はあるまじり本店の方へ顔を出してないし、詳しいことは分からんようになってしまったね。

やっぱり、金沢のこの町に骨を埋めるといふか、うちの人(主人)の心が隅々まで染み込んでいる処(店)にいと、何や知らんけど不思議に落ち着いて来るようやし。

そうや、あの頃(昭和6年)やったわ、富山の本店で番頭をしていたうちの人から結婚してほしいと言われたのは。父親やら、母親やら、昔は当たり前やったたくさんの兄弟姉妹、大勢の店の番頭や丁稚が勢揃いして写した写真を見ると、まるで二人とも子供みたいな顔をしたのに。今から思えば、信じられんほどに若かったし、純情やったんやね。

結婚してしばらくして、長女が小学校へ入ってからのことやったね。金沢の尾張町で、今の店を売りたいという話があったので、うちの人はずぐ行くことになったんや。こんな時、男の人は本当に簡単に物事を決めてしまえるもんやと思うたわ。

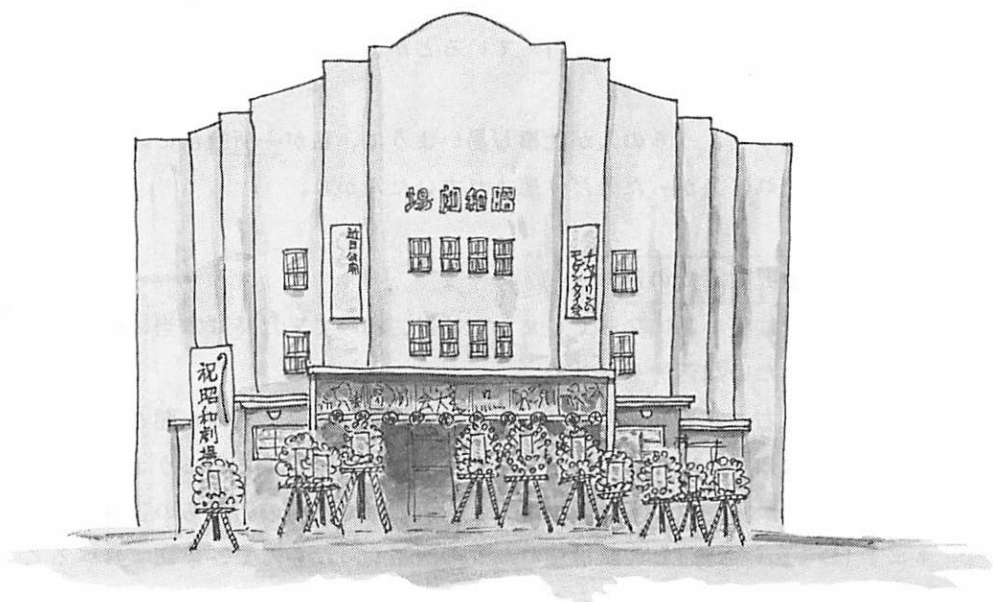
私が内娘で、1番目に生まれた長女に育ったもんで、何んにも世間様のことは知らんし、気まま一杯やったんや。けど、とにかくあの人と一緒にやさい、という気持ちが強かったやったんかね。それに、富山の長男も、私等がおらんことになることで、本格的な気持で商売に精を出して欲しかったし。父親には「ごめんなさい」と心の中であやまりながら、とうとう住み慣れた富山を離れてしまったんや。尤も、うちの人、長年富山で培って来た大好きな古書の仕事を、加賀のお殿様のいた金沢の街で出来るというんで夢中やったみたいけど。

確か、今度の大戦争が始まるすこし前の昭和14年やったもんで、来て見ると、お城の中の七連隊の軍人さん達も大勢いたみたいやった。そんな軍人さんに会おうと、家族の人が面会にあっちこっちから訪ねて来る人出で賑やかやっ

たのを覚えとる。

市電も店の前を走っていたし、金沢らしい大きなお店も並んでいるし、向かいの老舗のお菓子屋さんなんか、眺めていて感心するほど人の足が絶えることがなかったね。

それでも、一時の賑やかさからいえば、一段落しているということやった。そういえば、つい先だってまでは、隣に一九席という寄席や、お菓子屋さんの裏通りにも第四福助座という寄席もあったそうやけど。このごろでは、上尾張町に昭和劇場という活動写真のハイカラな昭和劇場という映画館が去年(昭和13年)衣替えて出来たりと、少しずつ時代が変わり始めていたんや。



慣れない金沢言葉も、ちょっと分かり難くて苦労したし。初めの頃は、そりゃ誰も知った人もいないし、心細いというんか、本当に寂しい思いの毎日やったわね。

うちの人しか知らんし、ここの処(金沢の尾張町)まで来たんやから今更帰るなんてことは出来んし、もう付いて行くしかないと、何度覚悟をし直したことかしら。

近ごろの人のように、気楽にあっちこっちでしたい放題に生きるなんて器用な真似は私の性に合わんし。もう今では懐かしいことになってしまいうたわいね。

しばらくして、上尾張町の方で、砂糖やいろいろな粉の間屋をしているお店のご新造さんが同じ富山からの人で、同じ女学校の先輩やったもんで、ちょっとし落ち着けたんかね。

あちらも古い家で、いろんな昔からのシキタリやなんかがあるみたいで、大変そうやったけどね。幸公人も何人かおって、おかみさんとして奥を切り盛りするのに人一倍の苦勞があったみたい。何んでも、そこの店の5番目の息子さんが、有名な能楽師の家へ養子に行っているとか、古い格式があって大変やったようや。

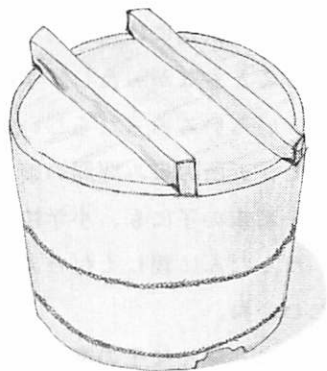
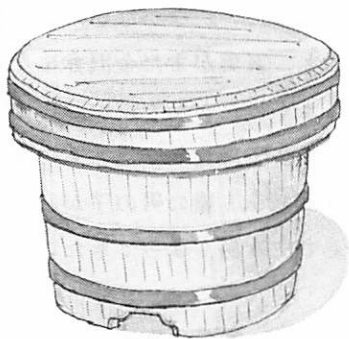
それから思うと、うちの人が仕事し易いように、私が一所懸命に頑張ることに集中していれば良かった分だけ恵まれていたんかね。

慣れない金沢生活での苦勞

もう、今では笑い話になってしまったけど、初めて来た時は本当に何も分からんで馬鹿みたいな苦勞をしたね。

とにかく、右も左も知らん人ばっかして無我夢中やった。何か聞こうと思っても、近所は知らない店ばかりやったもんで、気遅れがしてしまうようやった。

富山の本店から連れて来た丁稚2人と、引き継いだ前の店からの丁稚2人、ネエヤ(お手伝いさん)と、結構それなりの所帯やったもんで、最初に食べることから一騒動やった。水が違うもので、どうしても思うようにご飯が炊けないんやわ。それに、“おひつ”の形が富山と金沢で違うので戸惑い、何とか慣れたものがないかと、そこらじゅう探し回ったがや。訳が分からんもので、桐工芸の店で作ってもらえんかと頼んでみたり……。結局は、富山の本店から送ってもらって、ようやく一段落したんやけど。



万事がこの調子で、ネエヤと一緒にあって、魚や野菜が無いといって金沢市内を歩き回り、わざわざ遠い所で買って来てみたり。後で気がついてみれば、近くにいくらかも店もあったし、何よりも近江町市場なんていう大きな市場があったりという具合なんや。でも、こうして動き回っている方が気が紛れていたわね。うちの人は、私等女が店のことに構うことを嫌がったさかい、どうしても奥向きの仕事とか子供の世話はみんな私一人がせなならんことになるのや。仕事に没頭すると、それ以外のことは頭の中に入る余裕が出てこないんかしら。

そりゃ、いくらお客さんの前でご主人さんなんていわれていても、商売のこと以外には何んにも世間のことは知らんし、まあ男のお人さんはあれでいいのやろね。細かいことにこだわらず、自分の信ずることをまっしぐらに走る姿は、見ていると気持ちの良いものやったから。

だから、慣れない土地で頑張り切れたんやと思うわ。“飽きず”に私等の出来る“本の商い”をしていれば、いつか必ず金沢の人に認めて貰えるはずや。そのためには、私が出来ることだけは精一杯して陰で支えようと考えてることで、今日まで来たんやね。

それでも、子供達には可哀想な思いをさせたみたい。なかなかみんな揃って食事をする事もなかったし。学校へ行っても、言葉がまだ金沢弁になってないもんで、いろいろあったらしいわ。けど、よくしたもんで、いつの間にか友達が出来て、近所の畳み問屋の娘さんが朝、呼びに来たり。こちらに来てから生まれた一番末の子にも、小学校の遠足の日にテント屋の男の子が呼びに来たり。と、だんだんに親しく付合える人が増えて住み易くなってきたのはありがたかったわいね。

何かの折に、そんな子の家の話を聞いてみると、案外に商売している家は、皆んな大なり小なり家庭のことは二の次になっているようやったね。その代わり、みんな生き生きとしとったのは不思議やったね。

こだわりのない子供達

よっぽどの大店のことは知らんけど、商売屋の子供達は結構あちこちで遊んでいたね。今時ほど、塾や何んかと喧しくなかったし、学問そのものをあんまり大事に思ってたようやし。社会に役立つことが出来るかどうか、目が行ってたようやね。

商売人に大事なものは、読み書きがキチンと出来て、ソロバンが上手なこと。学者になる訳やなし、用もない知識をたくさん覚えることよりも、いろんなことを経験しての“知恵”を蓄えることの方が貴重や。そして、理屈を言うより先に、体が動いてこそ“なんぼ(幾ら)”のもの。実績を作ってこそ信用になる、という商家独特の風潮があったみたい。

子供達にしたって、充分遊んでから、時折好きな習い事へ行く程度やったし。ギクシャクしてなくて、どちらかというと自由に遊び回る悪戯坊主が多かったみたい。

うちの子供達が小さい(昭和35年)ころ、長女の友達は女の子ばかりだったもので、その辺のことにはあんまり気が付かなかったわ。けど、3番目の男の子の時となると、やっぱり商売屋さんの子供やな、と納得させられることが多かったわ。人様に対する返事なんかも、きっちり駈られていて、これだけは子供の教育には参考になったね。よく遊んでいたテント屋の子にしたって、内気でハニカミ屋なんだけど、他の子に比べて行動力は確かにあったわね。

5月の旗日のころは、向かい裏にある久保市神社のお祭りなんやね。ドンドコドンという太鼓の音色や、賑やかないろんな音が風に乗ってここまで流れて来ると、小学生のあの子(3番目の男)や、もうじっとしてられんみたい。うちの人に、日ごろあんまり構ってもらえんもので、それっ!とばかりに駆け出して行く姿は可愛いもの。屋台の店がズラリと並ぶ華やかさは、子供でなくても心か躍るもの。

まして遊び盛りの年ごろや、三日間は入り浸りで、お宮さんに子供を取られたようになるんや。

振りほち巻き姿の兄さんの威勢の良い掛け声につられて、オモチャのピストルやらG Iジョーの動く人形やらが当たるというめくりクジを何回もして、結局はアメリカ製と称する普通の定規やら風船しか取れんかったり。

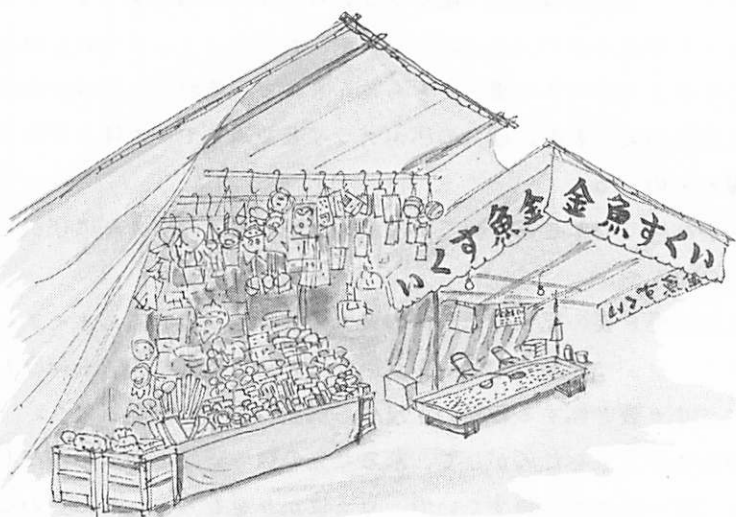
螺旋のうえから玉をころがして、落ちた先の数で景品を当てる遊び(ピンスロ)や水ヨーヨー釣りや金魚すくいで、カスばかりをもらったり。買わなくてもよいのに、ヒヨコを箱に入れて持って来てみたり。

そうそう、紙鉄砲やら、色とりどりのダイコンを詰めたダイコン鉄砲なんかを買って、自分で同じ物を作れないかと、くんずほぐれつもしていたね。

奇麗な色のビー玉や、ちょっと奮発して緑に鉄輪を巻いた木のコマをポケット一杯に持ったり。流行りの黄金バットやら赤胴鈴之助のペッタ[面子]を買うのはいいんだけど、どこかのガキ大将との勝負で、みんな取られてしまって、家へ帰って八つ当たりしてみたり。せっかく、裏側にインク色の絵や字の書いた珍しいペッタを見つけたのに、それまでも.....。

シチリンの炭の上で、紅しょうがなんかに乗っているちっちゃな鉄板に、こ

ぼさないようにメリケン粉を注ぎ、焼けて来たら針金みたいな箸でひっくり返す”ちょぼ焼き”。砂糖のふっくらした”かるめ焼き”。するめの甘炊き。パイがくわえているようなパイプや、首から下げる笛にハッカを詰めて粋がってみたり。それに、キャラメル色や白い色の水アメや風船アメに振りアメ、板アメをひょうたんの形に上手に割る型抜き、大きな綿菓子……。



走り回って汗をかいて来れば、最中の皮の中にシャーベットのようなアイスクリームを入れたのを食べたり。勿論、棒の形をしたアイスキャンデー(チャランパラン)やら、いろんな人形・動物の格好をした赤、青、黄の楽しい色のアイスキャンデーを順番に嘗めたり。ひょうたん型の風船の中に入ったイチゴ水やレモン水や、その凍らせたものをしゃぶったり。

家へ帰って、口を開けさせると、決まって真っ赤や真っ黄色になってたね。

その他に、メリケン粉にネギやらショウガを混ぜた”フライ焼き”に、鯛焼

きや焼きソバ等を新聞紙に包んで持って来るのはいいんだけど、温ったかい鯛焼きに新聞の字が移って残っていたり。あの新聞の印刷の臭いと混ざった香りが子供にはいいんやろうかね。今の衛生感覚からは信じられないけれど、四角四面な大人の考えの枠を超える夢と遊びの世界が感じられる風情が残っていて、忘れられないね。

ただ、お祭りは遊ぶものでなく、ちゃんとお参りするもんですよ！と、ケジメだけはしっかりと教えてあったので、お小使いを使い切る前に、お賽銭だけは最初に上げてみたい。今でも、元旦の除夜の鐘になると、皆んなが寝ていても、必ず一人だけでもお参りに行く程やから。

でも、あの子は案外に世間が狭いのか、お祭りは久保市さんしか知らなくて、他へ行ったことがないのや。尾張町も上と下で神社が違うようで、上尾張町のテント屋の子なんかは、駅前近くの安江八幡神社になるんや。久保市さんに先立って4月の15日が本祭りだから、一緒に行こうと、さっさとうちの子を連れて遊びに行くには驚かされたね。久保市さん以上に屋台の店がたくさん並んでいて、こんな楽しかったことはなかった、と喜んでいたのを見るのは嬉しいものやった。

ところが、それだけでなく、金沢のお祭りはお彼岸さん(3月21日)に地獄極楽絵で有名な照円寺での屋台出しから始まって、5月19日の三社神社(今の豊田白山神社)まで続くと言われて、びっくりしていたし、私も驚ろかされたわ。小さい子が案外なことを知ってるんやね。そういえば、兼六園の横の石浦神社なんかも賑やかやったのを思い出すし。

でも、どうしてこの辺のお祭りはバラバラにするんかね。子供にすれば、あっちこっちで次々と続いてあるから楽しいやろうけれど。ここにも何か一向一揆の名残りで、人が一度に集まらんようにしているんかね。うちの人に聞いたら、何故かすぐ分ったやろうけどね。

店の商売と金沢気質について

前に商いしていたお店は、新本と文房具が主やったんやね。尾張町で商売す

る時に、1年間だけ前の書店の仕事を引き継いで欲しいと言われたので、名前も二つ一緒に並べたのを覚えとるわ。本当は、古書専門店をするつもりやったのだけど、まあ金沢で商売するには順序があるんやろう。やみくもに急ぐだけのもんでないし、これからじっくりと此処に腰を落ち着けるんや。それに、約束ごとを守ることは商いの一番大事なことやさかい。まず信用からや、と思った訳なんや。

鉛筆やら、学生さんの鞆なんかもあって、“花かるた”まで扱ってたのや。これを何も知らんと売っていたら、すぐに警察から怒られてしもうて。あの頃は、“花かるた”を売るのに許可が要ることを教えられて、しっかりと罰金を取られたのには困ってしまったわ。

まあ、何も知らんからこそ出来た強みやろうかね。そんなこんなで1年が過ぎると、だんだんと古書を中心にした最初の思い通りの店の体裁になって来始めたわね。

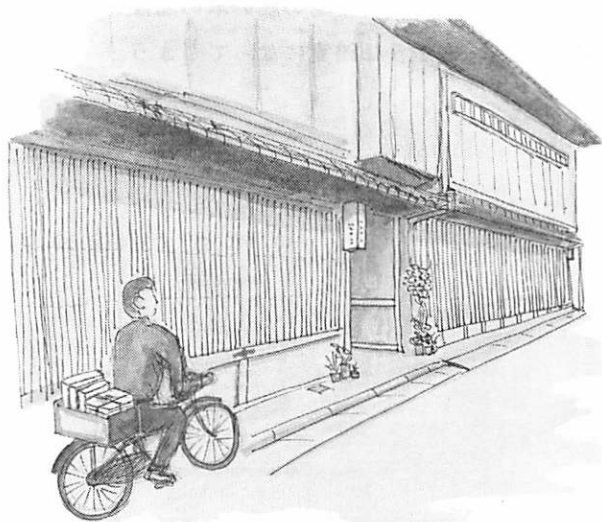
でも、案外なのは、金沢の人というのは学術書のような本をあんまり読まないんやね。百科事典なんかを店先に置くと、すぐに売れていた本店と違い、そんなに本が売れないんやね。ここは、子供に教育・学問を教えるよりも、もっと何か別の、というか実際に役立つ本の方が大事がられる土地柄みたい。

そういえば、浅野川沿いのお茶屋さんに入入りするのは、この近くの大店の旦那さんが多いとか。昼過ぎから、チントンジャンの音色が川の方から風に乗って聞こえて来るのは、必ずしもお稽古ばかりでないのかもしれんわね。それに謡の声も、どこからとなく聞こえて来てみたり。情緒があるといえればいいのか。無我夢中やった私等には、全然縁のないことやった。けど、お客さんが買いに来るのが謡本類のそうしたものが多かったわ。

ここらの本店では、財産をお金ばかりでなく、土地と“骨董品”に分けて遣すとか言われているそう。時代は変わっているけど、昔はお城の中と大きな商いをしてきた格式の名残りなんかね。だから、お茶や清元、能の謡や仕舞いなんかの習い事へ行く旦那さん達が多いというし。中には、名取りや職宅(能の名取り)の免状を持っている師匠顔負けの人もいたと聞いたわね。

骨董道具類を持っていたお蔭で、厳しくなっていたお店を持ち直すことが出来たなんて話を聞くと、なるほどと頷かされたもんや。確かに、美術商とか骨董品店、古道具店なんかが金沢には多いことに気付いたわ。中でも、尾張町界限には高級な茶道具関係の店が集まっていたね。

だから、骨董品を買う人は多いのに、学問の本はなかなか売れん。売れても謡本とか、趣味の世界の本が多かったわね。そういえば、前の店の看板にも、“わんや(宝生流能楽の本を専門で扱っている出版社)謡本大販売所”なんて文字が、彫り込んで書かれてあるし。



最初のころは、丁稚の子が自転車に乗って新本の雑誌や単行本を配達していたんやけど、普通の勤めている人の処より商売屋さんが多かったみたいやね。何かの拍子に川向こうのお茶屋さん付近へ配達に行くと、色っぽい声を掛けられて、若い子が戸惑ったなんて聞かされたわ。やっぱり、土地柄なんやね。

うちの人(主人)の商売感覚.....古書への思い入れ

店先にいる時のうちの人(主人)は、そりゃ勉強ばかりして、何やかんや本を読んでいたしね。昔から好きなことは知っとったけど、尾張町に来てからはなお拍車が掛かったようや。まるで、私でなくて本と結婚したんかしらと思うほどやったわ。昼で飽き足らず、ふとんに入る時までも、必ず4～5冊を枕元に持って来て、夜遅くまでずっと読むのには往生させられたわ。

自分が気に入った本は、後先のお金のことを考えずにどんどん買い込むので、さしもの[さすがに]広いはずの店の中でも、たちまち天井近くまでうず高く積まれる本で一杯になってしまったわ。昼でも薄暗い店内というのは、こんなことをいうのかしら。本の密林とか、海の底の本の海藻の群れとか、そんな中にいると自分が紙魚[しみ]のような錯覚になってしまう。



この人は、お客さんに本を売る気があるんかしら？と、まじめに考えないかん位のもんやった。どうかすると、ご不浄(トイレ)に入っている間までも読んどったみたい。

それだけに、本のことなら誰にも負けん知識を持つとったわ。何を言われても、ここの店にある本のことやったら、スラスラと返答をしていたもんね。ちょっとした学校の先生や学生さんなんかと、いろいろなことを次々と話していると、あっという間に時間が過ぎてしまうんや。私が、帳場台の前で立ちっ放しのお客さんも大変やろと思って、お茶菓子を途中で出すほどのなや。

そんな、帳場台に座ってお客さんの相手をしている姿を、奥の茶の間に引っ込んでから見直すと、頼もしさを感じさせられたわ。やっぱり、ここで商売をして良かった。そんなに本が売れんでもいい、親子して暮らして行きさえすれば充分……。なんて目頭を熱くしていると、「かあちゃん、お腹へったよ」との子供の声で、我に返ったり。

あれだけ古書に熱中する人というのも、珍しいのではないかしら。その代わり、新本にはさっぱり見向きもせんや。新本は、その本に対する何の知識がなくても、ただ決まった金額で仕入れて、定価どおりに売らただけなので味気がない！

古書は、その点、本に対する本物の知識がなければ、それを探しに来るお客さんに満足してもらえん。いわば、その本の持っている価値を発見する喜びと、お客さんに教えてあげられる喜びがある、というのや。

お金だけのやりとりをしていたんでは、いつまでたってもお客さんとの心のつながりは出来ん。価値を分け合ってこそ、お金だけでない満足をしてもらえるはず。

そんな気持を持ち続けることが、売ることばかり先走っている近ごろの商いのやり方と違って来ているようやわね。うちの人のにとっては、本を売ることが二の次ぎのような商売をしているんやけど、結果としては価値を見つけ合う付き合いの中から本が売れて行くんかね。

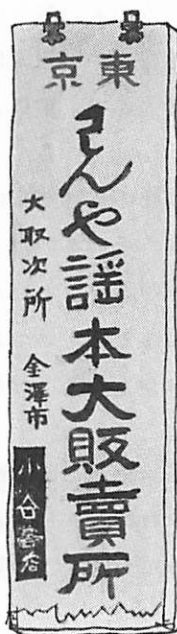
私も、ただ値段がどうのこうのという商売よりも、潤いのある商いの方が好

きやしね。こんな商売を続けてこれたのも、尾張町という街に来られるお客さまのお蔭やと感謝しているわ。

お客さんとの付き合い

好きなことがお客さんにも通じるんやね。あそこの主人は3度の食事より本が大好きで、話をし出したら商売そっちのけになる程や。それに優しい顔で応対してくれて、置いてある本については答えられんことがない。場合によっては、他の本のことについても教えてもらえる.....。

まあ、自分が本を好きやさかい、来られるお客さんとはトコトン付き合い合ったわね。だから、私が商売の心配をせんでも、いつの間にやら名物の古書店になっていて、何やかや人の出入りする店になっていたわ。遠方から、地図を片手に店を探し出しに来た人まで。



でも、来られる人、話す人全部が全部、本を買ってもらうわけではないけれど、入ってくれるだけありがたいことやと思わないかんのかね。この店は古書売る前に、うちの人の人徳を買ってもらう処なのかもしれん。

調べ物をしている人から何か聞かれると、たちまち水に帰った魚のように生き生きし出すのが、端から見てもすぐ分かる位やね。

その事柄については、店に置いてある何という本の、何ページから何ページにあるということまで返事するんや。お客さんが感心しているうちに、やおら立ち上がって、山のように積み上げてある本の中から、サッとその本を持って来るから、魔法みたいにたいしたもんやわ。2番目に生まれた長男が、大学のコンピューターの助教授になっているけど、うちの人の場合は、機械を超えた生きた字引やったね。それも、暖ったかい気持を持った。

たまに、目当ての本が山の下の方であって、ちょっとやそっとでは取り出すことが出来ない時は、2〜3日待って下さい、後で掘り出して置きますから、とお客さんに言ってたね。意味が分らないお客さんは、何のことか理解に苦しんだことやろね。

戦後は、お城の中が、陸軍の軍人さんから金沢大学に代わったもので、大学の先生やら学生さんなんかも噂を聞いて店へ顔を出すようになり出したわ。お蔭で、やっとそれなりに商売も軌道に乗り始めたのかね。

学生さん達は、そんなにお金を持っていないので、新学期の始まる頃には先輩の本を探しに来るし、先輩は先輩で要らなくなった本を、束にして買ってもらいに来てたね。まあ、買屋さんへ行くよりも、古書店へ本を売りに行く方が入り易かったんかね。

それでも、大口は買屋さんへ行く人があったんやね。尾張町界限でも、結構あっちこっちに買屋さんを見掛けたわ。買屋さんも大きくなると、小さな銀行みたいになるし、実際銀行に格上げして行くところもあったみたいや。それか知らんけど、昔の銀行はことさら必要以上に豪華に建物を作っていた節がないでもないかね。今でも、この近くにも風格のある建物が残っていたりするし。

卒業の時期が近ずくと、よく卒業論文の作成のために、店に来る学生さんが

あったね。やっぱり、うちの人に資料の載っている本を教えてもらったり、ここにはない本は県立図書館や市立図書館のどこそこにある、と教えられて重宝がられていたわね。

店にしても、正直いって学生さん相手に儲けるという気持でなく、出世払いと考えていたんや。将来社会人として一人前になった折にでも、良い商売をさせてもらえれば、と思っていたわ。

ある日、着物を着た若い女の人がお礼に来られたんや。「お蔭で卒業論文も通り、結婚することになったので挨拶に来ました、あの時は本当にありがとうございました」と言われて嬉しかったわ。

そういえば近ごろ、身なりのキチンとした年輩のお人さんなんか時折入って来て、高い本を買われるんやわ。「昔は本当にお世話になりまして、ご主人に宜しく」なんて東京弁で言われる方は、四高(旧制第四高等学校・金沢大学の前身)を卒業してから、東京へでも行って出世された学生さんやったんかね。

女の私ではあんまり難しいことは分からんけど、近ごろの、せわしない商売の仕方では、こんな暖か味がなくなってしもうて寂しい限りや。今も、儲けさえすれば、後はどうなっても構わんということだけはしたくないわ。

店でのお客さんと、この建物について

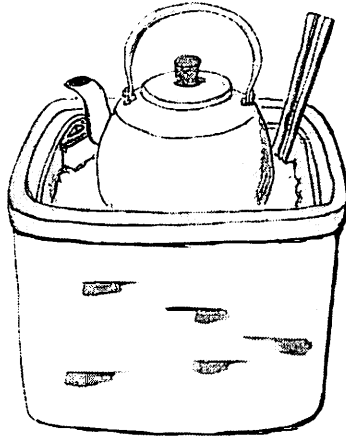
この店に来る人は、皆んな店の中に入るとホッとするんかね。日ごろ、人様の前では立場があって、いろんな気を張ることがあったりして、あんまり喋れんようなことでも、心が裸になるみたいに素直に話しをされとるね。私なんか気が付かんのやけど、やっぱり居心地の良さみたいのがあるんかね。

店中うず高く本が積まれて、薄暗いのにと思うけど、逆に安心するんかね。女の身としては、家中を掃除してホコリひとつ無い方が落ち着くはずやけど。男さん達の気持は分らんわ。ゴチャゴチャしている処の方が、これから何か新しいものを作り出す創造力が自由に湧いて来るんかね。

何やら難しいことを話す学生さんも、大学の教授の方も、誰も彼もここでは心の“純”なことでは同じなんや。うちの人が集めた本の山を掻き分けて、やっ

と作った空き場所で、ほそぼそと話の輪を作るんやわ。

暖かい時は、まだいいわ。寒い真冬の最中などは、1つしかない火鉢を囲むようにして、朝から晩まで時間をどこかへ放り出したようにして話し込むのやわ。



カントの純粹理性批判がどうの、ハイデッガーの実存がサルトルの無とどうとか。マルクスの唯物史観とヘーゲルの弁証法がどうの、いやケインズの経済学がどうの。鈴木大拙・西田幾太郎の日本人が考えると何んとかかんとか。と、まるで私には分らん外国語のような言葉ばかり並べて、百花繚乱の熱気に溢れるんやわ。

時折、議論が伯仲すると、「先生それは!」、「いや違う、お前!」なんて、ひとときわ高いとなり声のようなのが聞こえて、びっくりしてみたり。そして又、一段落して喉が乾くと、火鉢に載せてあるやかんの湯を使って、出がらしのお茶を皆で回し飲みしてるのや。私が、お茶の葉を替えても替えても、飲む方が

早いもので、すぐ白湯みたいに薄い色になってしまうのや。

たまに、常連以外の人が入って来ると、たちまちにこの仲間に加わってしまい、誰が常連で、誰がそうでないか区別がつかんようになってしまう。そんな区別をするより、お客さん皆んながここに入って来ると、上着を脱ぐように世間のことを脱ぎ捨てて、肩肘張らんようになってしまうみたい。

よく、飽きもせず続けられるもんや。男の人の心の底にある情熱の凄さを見せつけられるようやったね。やっぱり、これから世の中で何かを成し遂げようとするには、これくらいの熱意がないと人様を引っ張って行けないんやろね。

ふと、うちの人を見ると、本を読む傍ら、ちょっと眼鏡を上を持ち上げながら議論をしているお客さんを眺めて、心なしか微笑んでいるみたい。自分で何かの調べものをするのに、2階の倉庫へ上がっても、畳2枚分空いている手摺り付きの穴から、本を持ちながら時折り下を眺めてるわ。

そうや、この建物は一見平屋建てに見えるんやけど、中に入ると2階建という江戸時代そのままの趣きを残しているんやわ。元三田商店(明治時代はハイカラ洋品店)の母屋だったので、参勤交替の行列を上から見降ろさないようにとの、下尾張町商人の奥ゆかしさを感じさせているのやろね。

それだけに典型的な商家作りとなっていて、1~2階の間が吹き抜けになっていて便利なんや。2階の倉庫へ上っているうちの人とお客さんが簡単に話し出来るし。今更ながら、本の出し入れが簡便に行なえるので助かっているわね。

近ごろではお客さんだけでなく、どこかの猫までもぬくぬくと入り込むようになって来たわ。これ、猫ちゃん。あんたもここで何か食べさせてもらっているなら、店先へ行って、前足を上げていたらどうやいね。生きた“招き猫”も評判になるかも知れんし。

商いの“ところ”を伝えて

子供達がやっと一段落したと思ったら、うちの人が居らんがになっってしまうて、寂しいことになってしまったわ。あれは、先の江川さんが初めて市長さんになった昭和53年のことやったね。

それでも、不思議に素直な子供に育ったことは感謝せんといけんわ。上2人がそれぞれに相手を見つけてしもうて、今は3番目が、縁があってこの店を継いでくれているけど、何や、だんだんうちの人に似てくるようで、ふっと思いつき出させるようやわ。

以前のころより本を多少整理したとはいっても、薄暗い店内の雰囲気は相変わらず異世界のよう。奥まで押し寄せていた本が、少しは無くなったので、私や長男の嫁はほっとしているけれど。相変わらず、夏でも涼しい位の店の中で、あの子(3番目の息子)は何やかやと動き回り、いろんな本を取り上げては読んでいるし。夜遅くなっても、ガサゴソの音は止まず、とうとう、私の方が先に寝てしまう。

朝、起きて食事を準備をしても、なかなか起きて来ず。結局、お昼ごろになって、ようやく真っ赤な目をして来る様子なんか、うちの人と一緒に。朝に弱いのは、血のつながりの通りやということを現わしているわ。でも、ちょっとは早起きしてもらわんと困るわ。

仕方なく、午前中は代わりに帳場台に座ってないと、せっかく来られるお客さんに申し訳ないし。電気こたつを置いて、冷えないようにして座っていると、うちの人とのことが次々と思ひ出されてくる。あの昔風の真ん丸い眼鏡を掛けて、好きな古書に没頭出来たんは幸せやったんやろね。

まだ落ち着きは足らんみたいやけど、あの子はあの子なりに考えて、いろんな人との“ふれあい”を大事にしているようや。だから、ただ古書売ることよりも、お客さんとの話の中に何かを見つけようと努力しているのか、ついつい時間が長くなってしまふみたい。

私にしてみれば、目先の商売を追い掛ける今風に流されることを心配していたけれど、それだけは安心出来るようで、ほっとした気持。いくら、うちの人の子供達を構わないといっても、仕事に打ち込む姿だけは、しっかりと見せていたんやね。何んにもしないようできて、何かを無言のうちに教える男の人の一面を羨ましくも感じているこのごろやわ。

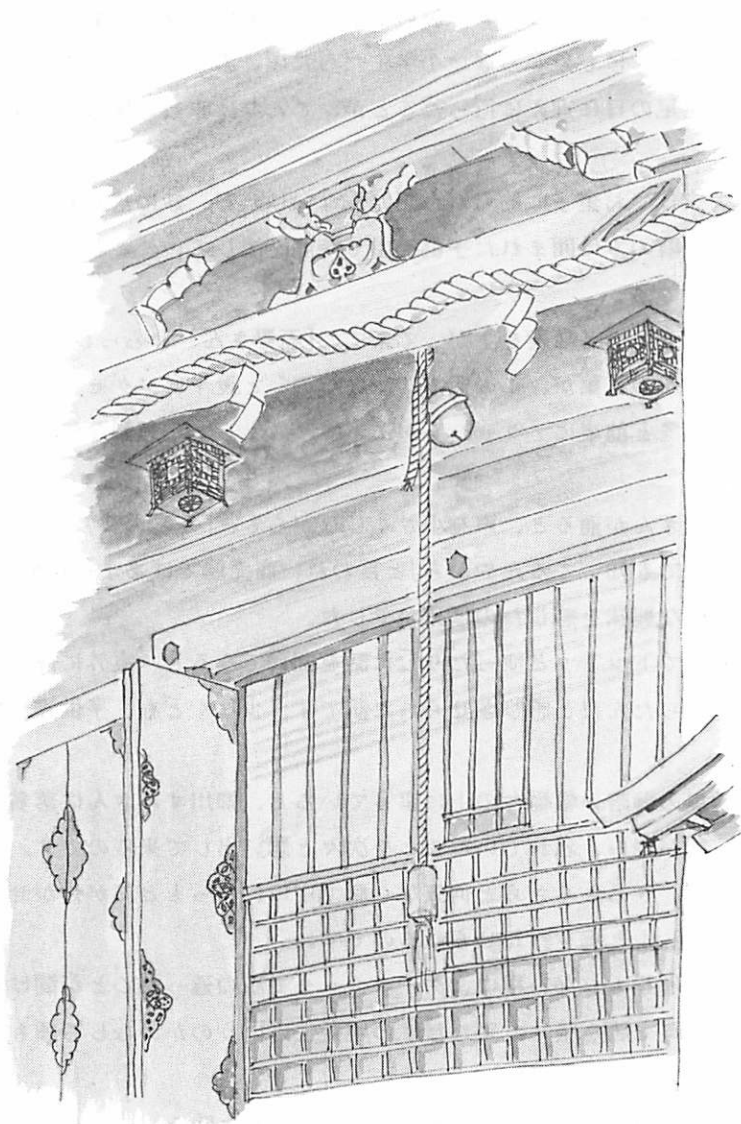
そういえば、私はうちの人その後ろ姿や横顔ばかり眺めていたようで、真ん

前からはめったに見つめなかったような気がする。そんだけ、黙ってついて行けば何んも心配はいらん！と思うとったさかいやろね。人を信じることの素晴らしさを知れば、人様から信じられることにもなるんかも知れん。と、最近は考えるようになって来たわ。

やっぱり、忘れかかっている何か大事なものを、決して忘れないような店にしておくことを、今はあの子に望むだけや。

柳川すみ・楳 (おうな) について

明治四十一年二月五日生。昭和六年、当時番頭の昇爾氏と結婚。昭和十四年に富山本店より尾張町に二人で南陽堂の分店を出す。以来、慣れない土地で古書販売の価値に情熱を燃やす夫を助けながら、名物書店としての信用を得る。



あとがき

実は、今回の話の中にはテント屋の子として、著者自身が登場させられています。当時、何んにも分からない小学生だった頃、素朴に近くの気の合う子だと思って、遠足の日に迎えに行ったことが、こんなに味わい深く感じられていたなんて。

以来、美味しいお菓子里に釣られた訳でもないけれど、妙に落ち着く店へ遊びに行くと、2階の本に囲まれた子供部屋で時間を潰していたことがあったのを覚えているのです。

トントントンと階段を上がって来て、「石野さん、いらっしゃい」という、優しいお母さんの言葉が、この辺では“いしの”と後半にアクセントがあるのに、“いしの”と前半にアクセントがあって、ちょっと不思議な気もしてました。

時折、お父さんが通ると、声を小さくしながら、「うちの父ちゃんは偉いんだぞ。何んでも知ってるんやから」と言われ、商売屋ではあまり自慢しない内容に、新鮮な興味を感じたのは確かでした。

今回、改めてトットとゆったりした話を聞いてみると、案外に商売屋同志での交流もあったんだと感じさせられた訳です。少なくとも、子供達に関しては。

店の一番奥の薄暗い帳場台の上に座っていると、柳川すみさんは落着くんでしょうか。話が弾み、忘れていたことを次々と思い出して来るのです。自分の平生のままで、さらさらさらと何気なく話す中に、あっ！と気が付かせられることや、じんっ！と胸を打たせられるのです。

外観からは信じられない程に、ダイナミックで芯の通ったことが聞けるとは。やはり、尾張町で店を張って来ただけの甲斐性というのか、むしろ頼もしさを感じさせられました。

この街に“息(粋)づく”何かに触れられたありがた味を、生まれ育って来た者だけでなく、この気持を少しでも皆様におすそわけ出来れば幸甚の思いです。

発 行 = 1 9 9 2 年 8 月 吉 日

著 者 = 石 野 琇 一

さ し 絵 = 村 上 隆

発 行 所 = 金 沢 市 尾 張 町 1 丁 目 1 1 番 8 号

尾 張 町 商 店 街 振 興 組 合

尾 張 町 若 手 会